

にんじん栽培基準(セリ科)

J A鳥取いなば 営農指導センター

《栽培特性》

- ・生育適温は18～21℃。着色適温は16～20℃で、13℃以下では着色が悪くなる。
- ・乾燥すると発芽が著しく悪い。また、古い種子は発芽率が低下しやすいので注意する。
- ・肥沃で水はけのよいほ場が良いが、未熟堆肥の施用は品質が悪くなる。
- ・ある程度の大きさ以上になってから、低温に遭遇すると花芽分化し、その後の高温・長日条件下で抽苔をする。

《栽培概要》

□□：太陽熱処理 ●：播種 ▲：定植 ■■：収穫

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
夏まき						□□□□□●	●				■■■■■	

《主な品種》

向陽二号 (タキイ)

《時期別の主な作業》

	作業	技術内容
圃場準備	畑づくり	完熟堆肥を施用して、土となじませる。 元肥は、太陽熱処理前までに施用する。深さ20cmを目標に耕す。
太陽熱処理	畝立て マルチ被覆	畝立ては、適度に土が湿っている時に行う。 マルチ被覆は、降雨後あるいは適度に散水してから行い、畝間も含めて雑草を生やさないため、2畝分(4条分)を一度に行う。マルチは畝と密着させて隙間ができないようぴっちりとする。 被覆期間は、盛夏期(7～8月)の1か月程度が望ましい。
栽培管理	播種	播種は太陽熱処理後、透明マルチを除去して行う。マルチ除去後、雑草を生やさないため、畝表面を大きく攪拌しないよう注意する。播種方法は2cm間隔程度の条播きか、1ヶ所3粒播きの点播きとする。栽植様式は畝幅70～80cm、条間15cm程度の2条まきとする。 播種する溝の深さは裸種子で5mm、コート種子で1cmとし、播種後は溝を埋めるように覆土し、上からしっかり押さえてから灌水する。
	間引き	第1回間引きは本葉2～3枚頃、株間3～6cm程度に行う。 第2回間引きは本葉6～7枚頃、株間6～10cm程度に行う。いずれも草勢の強すぎるもの、弱すぎるものを対象に行う。
	土寄せ	茎葉で通路がふさがる前に、通路の排水と青首防止も兼ねて土寄せを行う。
	追肥	第1回追肥は播種後30日(肥大始め)頃に行うが、濃度障害が起こりやすいので注意する。 第2回追肥は播種後45日(肥大率最盛期)頃、第3回追肥は播種後60日(肥大最盛期)に行う。第2回、第3回の追肥は必ず行う。
	防除	根の肥大が本格化する播種後60日頃から黒葉枯病と黒斑病の発病が目立つようになるので注意する。 また、ヨトウムシやキアゲハ幼虫による食害がひどくなる場合があるので、見付けたらまだ小さいうちにBT剤散布をするか、大きい幼虫は捕殺する。
収穫	収穫	収穫は適期を見て行う。播種後110日頃、根重150g以上を目安とする。

《施肥基準》

単位：kg、1aあたり

肥料名	合計	元肥	追肥			備考
			1回目	2回目	3回目	
完熟堆肥	150	150				
発酵鶏糞			10	10	10	
菜種油粕	6	6				

《栽培のポイント》

■未熟有機物の投入は禁物

主根の直下に多量の未熟有機物があると、岐根が多発します。未熟有機物の多量施用は全面混和をしても岐根の発生や発芽不良、立枯病を助長することがあります。そのため、十分腐熟させたものを施用するか、腐熟するまでの期間をとってから播種をする必要があります

■太陽熱処理

①畝づくり

基肥等を充分混和して耕うんしたら、太陽熱処理を行う透明マルチの幅分の土あげを行い、畝を作ります。畝づくりは2畝分を一度に行うと効率的です。

②透明ポリマルチの被覆

太陽熱処理の効果を高めるために必ず透明マルチを用いて隙間がないよう密閉被覆を行いましょう。雑草抑制効果が損なわれるため、太陽熱処理後の畝は耕うんや、大きな攪拌をしないよう注意する。

■いかに発芽を揃えるのか

①乾燥を防ぐ

にんじんの種は発芽する際に必要な水分を吸収する力が弱いいため、発芽不良になりやすい。播種時に土壤水分が少ないときは、発芽がそろうまで（夏まきで8日間前後）灌水をしっかりと行います。

②播種時の温度

にんじんの発芽の最適温度は15～25℃で、発芽に要する日数は温度の影響を強く受けます。

15℃～20℃では8～10日で発芽するのに対し、10℃では14日、5℃では30日以上かかってしまいます。また、35℃以上になるとほとんど発芽しなくなるので注意が必要です。

■発芽後2ヶ月で良し悪しが決まる

ニンジン、播種後から約1～2ヶ月間で、直根がまっすぐ伸びて、この段階で肥大する根の長さがほぼ決定します。この時期に乾燥すると、根の伸びが止まってしまうと同時に、根の組織が老化してしまい、裂根やえくぼ症（首部の穴）などの原因になる場合もあります。そのため、この時期に適度なかん水などを行うことで、スムーズにしっかりとした根を伸ばしてやるのが大切です。

■生育後期は土壤水分は控えめに

根の肥大は、土壤水分が適度にあった方が進みますが、カロテンや糖度は乾燥気味の方がよく生成されます。土壤水分が多すぎると、カロテン生成が少なく、根色が淡くなったり、収穫時に土壤水分が多いと裂根が多発したり、肌が粗くなることがあります。そのため、生育後期は乾燥気味の方が、カロテンも糖度もあがります。